第二十八卷　第一號



# 「日本武學史」を讀む

原　隨　園

著者佐藤堅司君は、曩きに「世界兵學史話」を出され、今また「日本武學史」を出版された。同君の武學に關する注目は、學生時代からのことであり、時流に棹さすものではないのである。更に每年恒例の如く、武學に關する研究を發表されてゐた。昭和十四年以來は、「日本武學研究所」に立て籠つて、段々研鑽を深められて居り、日本における斯道の權威である。

同君の强味は、夙に西洋史學、殊に西洋における武學の研究を根柢として、それから入つて日本流の武學の討究に努められてゐることである。それは、ひとり眼界が博大であるといふばかりではない。幕末に輸入された歐洲兵學の源流を尋ね、それが如何に日本的なものに淳化されたかといふことの檢別に、極めて精確さが附與されてゐる點である。

例へば、本書第二十九章の葉華兒多（ファルト）戰法考や、第三十章の三兵戰術の沿革の傳來と日本化の章にみられるのである。

また、これは當然のことではあるが、武學者の述作に對する博搜到らざるなく、その都度之を發表されてゐる。先年刊行された「鈴木春山兵學全集」三卷の如き、或は三宅友信に關する採訪の如きその一端であり、之等は「日本武學大系」として、やがて彥大三十卷が出版されようとしてゐる。

本書は、本質篇、發展篇、考證篇の三部に大別され、第一部は日本武學の神髓以下七章、第二部は、日本武學の發展以下十三章、第三部は、「神武觀」に關する史的考

察以下十四章、總計三十四章より成る勞作である。

第一部の本質篇において神武道を提唱し、之は神智、神勇、神仁の三德を本來的に綜合したものであると說き、日本の武を一貫するものだと考へてゐる。そして茲に日本の武學が單に兵學にあらざる所以を認めんとしてゐる。

第二部は此の日本武學が、特に山鹿素行以西關の國防觀にいたる發展を說いたものであつて、日本武士道の精神に觸れるは勿論であるが、日本兵制の本義、國防國家の理念にまで及んでゐる。正に本書の中核をなもすのといへよう。

第三部は、結局武學史大成の過程としての考證を主としてゐるが、物師考の如きは短篇ではあるが力作である。且つ此の篇中には、さきに一言した歐洲兵學にも論及してゐるのであつて、此の點は注目されるべきである。但し、所謂考證として考へる時には、なほ精密さが要求されねばなるまい。例へば武士道といふ語の起源の如きである。

兎に角、日本武學史として體系つけんとするのであるから、なほ精粗一ならざる嫌ひなしとせず、殊に武士の勃興し、活躍した時代については、殆んど缺如してゐる。日本書紀に武學の濫觴を求めた熱意を以てすれば、中世及び近世初頭に、なほ說かるべき點が尠くない筈である。しかし、流石に近世も終りに近づくにつれて、その內容が豐富になつて來て居り、著者の本領はそこに存するかと思はれる。

また武學史の體系樹立に熱心なる餘りに、國史敍述に武學史的觀察が缺けてゐるのを難じてゐるが、それは少し嚴に過ぎるものである。のみならず、本書に扱はれてゐる武學が、在來の所謂軍學を主流とせる實際に徵してみれば、神武道卽皇道とする著者の述作そのものが、反つて狹隘に墮したといはなければならなくなる。

體系化の中道にある本書であつて、ゆくゆく「武學大系」の完成後に本書も完了さるべきことは、著者自身の既に計量せるところであるから、いはば將來の素描として讀むべきである。その意味において、第二部の諸篇は

誠に努力識見の吾人を推服せしむるところ尠少でない。殊に、既に出づべくしてなほ未だ出でざりし武學に關し、著者の開拓せるところは、大に尊敬さるべきである。

唯、將來大成さるべき武學史に關して、望まるべき點は、愛國の熱意の裡に、冷靜なる檢討を用ひられんことである。また甲州流、北條流、越後流の武學についても十分なる述作をされんことである。武學大系の大事業を企て、更に武學史開拓に挺身さるゝ著者の加餐自重を望んでやまない。